

第4回受賞作選考理由

選考委員長・石井明

従来、中国の労働組合＝工会についての研究は、特定の工場の聞き取り調査の紹介を中心とするものが多かった。工会のあり方は中央政府レベルや労使間では大きな問題になっていたにもかかわらず、その基本的な問題点については、ほとんど日本に紹介されてこなかった、と言ってよいだろう。

小嶋論文は、極めて鮮明な問題意識の下、工会をめぐる改革論議を手際よく整理し、どのような論争がなされているかを、現地の新聞、雑誌等に依拠しながら明らかにした労作であり、オリジナリティが高い。手短かに紹介すると、まず、市場経済化が進むなかで、労使間対立が激化しているにもかかわらず、組織率が低下しているという、中国の工会が置かれた危機的状況を抉り出す。そのうえで、工会内部の改革論議を(1) 工会の構成員をめぐる議論、(2) 工会の幹部人事をめぐる議論、(3) 工会の財務制度をめぐる議論にわけて整理・分析している。結論として浮かび上がってきたのは、人事・財務の両面で依然として党・政府の一組織・一幹部としての地位に固執する消極的改革論と、党・政府から人事・財務の面で切り離された利益集団としての再生に工会組織存続の可能性を見出す抜本的改革論の狭間で揺れ動く工会改革の姿であった。

小嶋論文は、工会改革の動きは、この二つの論議の狭間で遅々として前進していないように見受けられる、と指摘し、どちらの方向に向かうのかについては軽々に断定を避けており、それもこの論文の水準の高さを示している。議論の展開、論証の手続きなどにも無理がなく、説得力のある論文であることは選考委員が一致して認めるところである。

小嶋論文は「結語」で、一つ一つの改革論議に着目した時、その中に、体制の変容をも示唆する大きなダイナミズムを感じることができる、と指摘している。この問題の考察を進めることは、中国の今後の政治・経済・社会の動向を見極めることにもつながる大きな意義があるのである。その意味で、本論文は、中国の工会という特定の対象についての詳細な研究を通して、中国社会の変容と改革開放路線の行方、中国社会主義の変容という大きなテーマを意識した研究としても評価しうる。さらには中国に限らず、移行経済の下での社会主義国の労働組合のあり方を考えるうえでも示唆に富む論文である。一般的に言って、特定の組織、部門を対象にした研究はともすると精緻さのみが追求されて、その背後にあるより大きな、そして重要なテーマが見逃されがちであるが、本論文は個別研究の精緻さと、大きなテーマの両方を繋ぐことを意図した研究とも言えよう。もちろん、本論文では大きなテーマに対する考察は十分とはいえないものの、それは逆に小嶋会員の研究の今後の発展の可能性が大きいことを物語っている。

以上の理由により、選考委員会は小嶋論文が第四回アジア政経学会優秀論文賞を授与するのに相応しい論文である、と判断する。

受賞の言葉

小嶋華津子

2006年の秋季大会で優秀論文賞をいただいた時、私が皆様の前で何をお話したのか、すでに15年前のことではっきりとは覚えておりません。

その年の秋季大会は慶應の日吉校舎で開催されました。出産後久方ぶりの学会参加ということもあり、みなとみらいに海が見える宿を確保して、意気揚々と参加したのを覚えております。しかし、今から思えば「前のめり」としか言いようのない私の判断ミスによって、大会に参加した皆様にご迷惑をかけてしまいました。それはちょうど、学会が大会会場の一角でチャイルドケア・サービスを提供する試みを始めた頃のことでした。まだ0歳児の娘に「社会勉強してもらおう」と申し込み、連れて行ったところが、お昼休みの時間、学会監修の現代アジア研究叢書の編集会議に出席していると、校舎じゅうに娘の泣き声が…大変おそろしたことが記憶に残っています。

学会の優秀論文賞については、実は自分が受賞することになるまで、その存在を存じませんでした。そして改めてホームページから、それが諸先生方のご寄付によって創設されたことを知り、若手の研究活動を励まし、支えていこうという先生方の温かな志に、感謝の気持ちでいっぱいになりました。授賞式の場でも、学会を支えてこられた先生方への感謝の気持ちをお伝えしたように思います。

あれからすでに15年が経ち、私自身が、優秀論文賞授与の対象である若手を育成する立場となりました。学会が、国籍や性別を超え、あらゆる立場の会員にとって活動しやすい場になるよう、諸先輩方の背中から学びつつ、力を尽くしていきたいと願っております。

付記：受賞の言葉をウェブサイトに掲載するにあたり、過去を振り返り受賞者に現在のお気持ちを記していただきました（優秀論文賞選定委員会、2021年6月）。